

明

治

年

庚

辰

年

二

本

D01.02
K
1227

88

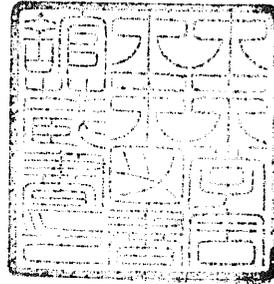
丁
21

七. 角六

葦原



明治三策史



登録	昭和40年7月22日
番号	第 1227 号
社団法人	土木学会
附属	土木図書館

名著100選図書

序

今や明治工業史成る。由來本邦の歴史は各方面に亙りて幾多公刊せられたりと雖も、工業に關するものに至つては、極めて寥々たるの憾なしとせず。然るに十有餘年の刻苦を重ね、茲に本書の完成を見る。世人之によつて我が工業の發達變遷の徑路を熟知するを得るは蓋し本會の痛快とするところなり。

惟ふに一國工業の盛衰は國家の消長を示すものにして、本書は正に我が明治史中重大なる地位に置かるべきを信じて疑はず。されば其の公刊は啻に斯道を裨益するに止まらず、國家に資するところ亦尠ならずと謂ふを得べし。豈慶賀せざるべけんや。一言以つて序とす。

昭和四年六月

緒言

凡そ國運の隆替は其の國工業の消長盛衰と相關聯するところ極めて大なること、今更絮説を俟たずして明かなる事實とす。而して我が國が僅々過去半世紀の短日月の間に、突如として海外の大國と肩を伍するの地位に至りし所以を討究し、更に我が國の現状を領會し、併せて其の將來を考察せんとするものは、少くとも我が國の工業をして、今日の如き盛況を見るに至らしめたる明治年間に於ける各種工業の沿革に就いて知るところなかるべからず。然るに世上未だ此の目的に副ふべき良書の公刊を見ざりしは、吾人の深く遺憾とするところなりとす。

惟ふに此の業たるや、甚だ難事に屬すと雖も、今にして之を大成せずんば將來遂に其の發達變遷の跡を窺ふに由なく、其の資料も年所を経るに隨ひ、逸散堙滅して復た再び容易に之を得ること能はざるに至るべし。故に之等資料を蒐集し、之に據つ

て明治年間に於ける各工業を分類し、其の發達進歩の實狀を詳述し、以つて之等工業が如何に政治經濟軍事交通其他國家のあらゆる方面に影響するところ多かりしか、又如何に隆々たる今日の盛運を誘致するに與つて力ありしかを示すは、最も機宜を得たるのみならず、又實に時代の要求なりといふも過言にあらざるべし。

蓋し余は夙に茲に留意するところあり、明治工業の我が國家の隆昌を齎らしたるところ頗る大なるを觀、然も其の資料たるや帝に國內に止まらず、廣く海外にも之を求めざるべからざるを察し、明治三十三年渡英の際、恩師ダイヤー先生に謀り、歸朝の後は明治年間並に其の以前に於ける、我が國工業に盡力せられたる人々に就き其の資料を集め、明治四十二年には徳川前將軍に乞うて題字の揮毫を得其の編纂を進めたり。

時恰も大正五年、工學會に於いて明治工業史編纂の議起るに會し、余は十有六年の間、獨力蒐集したる資料を提供し、更に完備せる一大事業の成功を期し、會の委囑を受けて明治工業史編纂委員長の任に就きたるなり、而して明治の工業に參與したるもの、又其の編纂に適當なるもの百三十餘名を選んで委員を囑託し、分科を設け、幹事を置き、囑託員を作りて事業を進行せしめたり。

抑、工學會は明治十二年の創立に係り、實に我が國工業に關する學會の濫觴とす。當時會員僅に二十三名なりしが、明治二十三年五月第一回大會を開催せし時に當つては、會員凡そ一千二百名を算し、辱くも恩賜金を拜受するの光榮に浴し、明治十四年に會誌第一卷を上梓してより、大正元年末第三百五十七卷を發行するの盛大を來たし、工學百般に互れる論說調査を詳述し、國家に貢獻したるところ蓋し尠少ならず、而して時勢の進歩工業の隆盛と共に、分科の細に入りて研鑽するの必要を生じ、

土木、機械、電氣、造船、建築等各種學會の創立を見るに至れり。雖も、各學會間の大綱聯絡を要するを以つて、工學會は大正十一年に其の組織を變更して個人會員を有せざるものとなり、社團法人日本鑛業會、同日本鐵鋼協會、同土木學會、同造船協會、同建築學會、同電氣學會及び火兵學會、煖房冷蔵協會、工業化學會、電信電話學會、機械學會、照明學會なる十二學會の法人若は代表者を以つて組織することゝなれり。工學會は前記の如く、明治工業史編纂に便宜の地位にあるを以つて、余の素志は工學會の努力によつて貫徹せられ、本史の世上に出現するに至りしは、豈獨り余の欣とするところに止まるものならんや。明治工業史は、主として明治年間に於ける我が國工業の發達を抒述するものなれども、其の起因するところ或は上古に遡るべきあり、又は其の事業にして大正年間に亙るものあるを以つて、明治年間を詳述せんと欲せば自ら筆を其の前後に及ぼさ

るべからず。翻つて一國工業の關係するところを観るに、其の範圍頗る廣く、或は事件の外國に關聯するものあり、時に軍機の秘密に屬するものあり、更に資料の得難きもの、又は其の詳述を避けざる可からざるものあり。之に加ふるに其の編纂に就きても各方面に亙りて多數専門家の努力を待たざるべからざるは勿論、幾多の年月と多額の費用とを要するなり。されば本事業の遅延今日に至りて、漸く其の完成に近づきたるは、止むを得ざるところとす。

既に述べしが如く、工業は其の範圍甚だ廣きが故に、本書は之を土木、機械、電氣、造船、建築、鐵道、化學工業、鑛業、鐵鋼、火兵、地學、及びそれらの綱領を序述する數篇に分てり。而して各篇は其の次第を異にするを以つて、全く之を畫一すること能はざるも、勉めて其の統一を期したり。

願れば此の編纂委員中には、明治の工業に關係し、相當年齒

を重ねたる人々を交へたれば、物故せられたる委員も少なからず従つて事業の遲滞を來せしこともありしが、漸く大部分の編纂を終了し、其の一部を上梓せんがために、淨書を印刷所へ送附することを得しは、大正十二年の盛夏なりき。然るに、偶々關東の大震災火災に際會し、印刷所に在りし造船篇の原稿は之を烏有に歸せしめたり。其の原稿の工學會に於いて保管せし化學工業、鐵道、電信電話、航路標識、火兵、鐵鋼、地學等は辛うじて其の十中八九を搬出し得たりと雖も内務省、大藏省、遞信省内に保管せられし土木、建築、及び電氣に關するものは惜い哉、官廳と共に焼失するの不幸に遭遇せり。

此の如く、多數の歳次の間には、多大の困難に出會せしも、舊工學會の會員並に江湖の後援と多數委員等の獻身的努力とによつて、此の大編纂事業の目的を貫徹せんとするを得たるは、吾人の深く感謝するところなり。而して更に此の終局を助けて

之が上梓を速かならしめたるは、實に財團法人啓明會の好意によるるところ大なるを特筆せざるべからず。

昭和四年六月

明治工業史編纂委員長田邊朔郎

編纂委員名 (▲分科幹事)

青山秀三郎 (鑛業)	安達 禎 (機械)	淺野應輔 (電氣)
朝倉希一 (機械)	有坂鋁藏 (火兵)	井上禮之助▲ (地學)
伊東忠太 (建築)	岩瀬徳藏 (鑛業)	池田圓男 (土木)
石橋絢彦▲ (土木)	石川留吉 (鑛業)	稻田三之助 (電氣)
内田四郎 (建築)	内山新之助 (土木)	榎本惣太郎 (建築)
小原重次 (火兵)	大石久橘 (電氣)	大河内正敏 (火兵)
大熊喜邦 (建築)	大澤三之助 (建築)	岡田陽一 (鑛業)
太田利一 (化工)	加茂正雄 (機械)	加藤静夫 (電氣)
桂 辨 三▲ (鑛業)	鍵和田良平 (機械)	北村令司 (電氣)
吉川岩喜 (鑛業)	倉田龜吉 (鑛業)	萬野壯一郎 (建築)
鯨井恒太郎 (電氣)	日下部 義太郎 (鑛業)	草 間 偉 (土木)
栗山四郎 (電氣)	小西正二 (機械)	香村小録 (鐵鋼)
近 藤 茂 (電氣)	近藤仙太郎 (土木)	小山 磐 (機械)
佐伯勝太郎 (機械)	佐野秀之助 (鑛業)	櫻井省三▲ (造船)
佐々木清吉 (機械)	斯波忠三郎 (機械)	澁澤元治▲ (電氣)

島重治 (土木)	清水釘吉 (建築)	柴垣鼎太郎 (建築)
進經太 (機械)	杉浦宗三郎 (土木)	鈴木鎮雄 (建築)
鈴村秀三 (電氣)	關盛治 (機械)	關藤國助 (機械)
關野真 (建築)	關口八重吉 (機械)	田村鎮 (建築)
田邊湖郎 (委員長)	高松數馬 (火兵)	高城規一郎 (鑛業)
高松豐吉 (化工)	高津清 (電氣)	高田直屹 (機械)
高田善彦 (電氣)	高洲清二 (機械)	俵國一 (鐵鋼)
塚本靖 (建築)	堤正義 (造船)	利根川守三郎 (電氣)
豐田榮司 (火兵)	中村達太郎 (建築)	中山秀三郎 (土木)
南部麟次郎 (火兵)	永積純次郎 (鑛業)	永井當清 (機械)
西大助 (土木)	西松唯一 (火兵)	西尾銈次郎 (鑛業)
西田博太郎 (化工)	根岸政一 (機械)	伴宜 (土木)
廣田理太郎 (機械)	福田次吉 (土木)	福地信世 (地學)
福留喜之助 (鑛業)	福田豐 (電氣)	本多岩次郎 (機械)
前原助市 (電氣)	松澤博太郎 (鑛業)	松井清足 (建築)
的場中 (鑛業)	宮崎虎一 (鑛業)	密田良太郎 (電氣)
目黒末之丞 (鑛業)	用瀬松太郎 (幹事)	持田巽 (機械)

矢野道也 (機械)	八木靜一郎 (機械)	山口吉郎 (鑛業)
山内不二雄 (機械)	山縣保二郎 (火兵)	山口準之助 (土木)
湯淺藤市郎 (機械)	吉田太郎 (火兵)	吉田正秀 (電氣)
吉田永助 (機械)	米澤政治郎 (電氣)	米倉清族 (鑛業)
渡邊俊雄 (鑛業)		

物 故 者

玉木辨太郎 (幹事)	青木大三郎 (幹事)	金森鐵太郎 (土木科委員)
近藤虎五郎 (土木科委員)	中島銳治 (土木科委員)	市瀬恭次郎 (土木科委員)
廣井勇 (土木科委員)	井口在屋 (機械科委員)	吉田朋吉 (機械科委員)
石川留三郎 (電氣科委員)	浦田周次郎 (電氣科委員)	保科貞 (電氣科委員)
岸敬二郎 (電氣科委員)	寺野精一 (造船科委員)	新家孝正 (建築科委員)
清水三貞 (化學工業科委員)	河喜多能達 (化學工業科委員)	近藤會次郎 (化學工業科委員)
渡邊渡 (鑛業科委員)	野呂景義 (鐵鋼科委員)	大森房吉 (地學科委員)
上野景明 (鑛業科委員)	田島猶吉 (鑛業科委員)	

凡 例

一、外國地名人名物名は片假名を以つて書し本文と區分せしも、其の相互の間には區別を用ひざることとせり。

一、() は多く註釋に屬するところに用ひ、¹ は引用書及び區別に使用せり。

一、術語、譯語は各専門に於いて普通に使用するものを用ひ、假名及び濁點の如きも之に準ずることとせり。

一、度量衡は畫一すること能はざるが故に其の當時使用されたるものを記載せり。

一、本史編纂に際し蒐集し得たる原稿は各篇専門を殊にするを以つて精粗一なること能はず、依つて史實を誤らざるを主として、幾分を改削し、其の統一を期するの已むを得ざるに至れり。

明治工業史 土木篇

例言

本篇は十四編七十一章より成るものにして、最初石橋絢彦氏其の取纏に従事せられ、故近藤虎五郎氏及び池田圓男氏之に襲き、島重治氏之を擔當せらるゝに迫んで、其の努力によつて本篇の完結を見るに至れり。

其の第一編道路、第五編軌道及び第二編中の砂防は、池田圓男氏の擔任せられたるところにして、第一編の道路に關しては、篠崎亮氏資料を蒐集し、其の編纂に従事中、關東大震災に遭遇したるも、同氏の努力によつて、其の資料を全うし得たることは、深く同氏に對し感謝の意を表するものなり、第五編の軌道に關しては、佐藤利恭氏の努力に待ちしもの多く、又砂防に關するものも、中明治以前に屬する部分は、大阪市史編纂主任幸田成友氏の援助を受けたること尠ならず、其の明治以後のものにあつては、赤木正雄氏の助力を得たるものなり、第二編河川の一部は、故金森鐵太郎氏、三浦矩明氏及び福田次吉氏編纂に従事せられ、而して島重治氏の努力によつて、全編の完成を見たり、第三編築港は、故廣井勇氏が病歿直前に苦心編纂せられたるものなり、第四編上下水道は、故中島銳治氏に執筆を委嘱せしが、起草を見るに先だち病歿せられたり、然るに同氏の知友門人相謀りて、同氏記念の爲に日本水道史を編纂するの舉ありて、右記念事業會の好意と、草間偉氏及び河口協介氏の努力とにより、此の編を完結し得たり、第六編運河、第七編發電水力及び第十四編土木教

育の三編を完結し得たるは、中山秀三郎氏努力の賜にして、第八編農業土木は近藤仙太郎氏第九編軍事土木は伴宜氏の執筆せられたるものにして、第十編航路標識は石橋絢彦氏の編纂せられたる、頗る完備したる其の沿革史中より抜翠したるものにして、第十一編都市計畫は内山新之助氏第十二編測量は村野爲次氏第十三編土木行政は田中好氏の執筆によるものなり。

以上各編の執筆者は、各其の専門の權威者にして、其の資料は又他人の容易に入手し能はざる貴重なる文獻に基づき編纂せられたるものなり。爰に一言を書して前記諸氏の努力を感謝するものなり。

昭和四年四月

明治工業史編纂委員長

田邊 朔 郎

目次

第一編 道路

第一章 總 説……………三

第二章 明治維新前に於ける道路事業……………六

第三章 明治維新前に於ける橋梁事業……………九

第四章 明治年間に於ける道路・橋梁事業……………三

 第一節 河港道路修築規則の設定……………三

 第二節 國縣里道の制定……………五

 第三節 重要道路の改修……………七

 第四節 道路築造標準制定……………一〇

 第五節 道路の維持……………一六

 第六節 並木取締……………一九

 第七節 渡船場及び賃錢橋……………二四

 第八節 道路延長及び橋梁調査……………三三

第九節	道路法案の變遷	三三
第十節	特種工事	三四
第五章	道路 橋梁工事費	五〇
第六章	國道・縣道・及び主要道路の發達	五四
第一節	國道	五四
第二節	縣道	五六
第三節	道路の幅員及び勾配	五六
第四節	國縣道工事費	五七
第七章	北海道・朝鮮・臺灣・樺太の道路	五九
第一節	北海道の道路	五九
第二節	朝鮮の道路	六一
第三節	臺灣の道路	六一
第四節	樺太の道路	五五

第二編 河 川

第一章	緒 言	五九
第二章	內務省直轄河川工事	六三
第一節	總 說	六三
第二節	淀 川	六六
第三節	利根川	六九
第四節	渡良瀬川	七〇
第五節	信濃川	七〇
第六節	木曾川	七一
第七節	北上川	七二
第八節	庄 川	七四
第九節	阿武隈川	七五
第十節	富士川	七六
第十一節	阿賀野川	七八
第十二節	最上川	七八
第十三節	吉野川	八〇
第十四節	筑後川	八二

第三章 直轄以外の河川工事

第十五節 大井川……………二七

第十六節 天龍川……………二七

第十七節 九頭龍川……………二六

第十八節 遠賀川……………二三

第十九節 高梁川……………二五

第二十節 荒川……………二七

第一節 總說……………一四〇

第二節 東京府……………一四二

第三節 京都府……………一四三

第四節 大阪府……………一五一

第五節 神奈川縣……………一五一

第六節 兵庫縣……………一五二

第七節 新潟縣……………一五三

第八節 埼玉縣……………一五三

第九節 千葉縣……………一六六

第十節 茨城縣……………一六七

第十一節 栃木縣……………一七〇

第十二節 奈良縣……………一七三

第十三節 三重縣……………一七三

第十四節 愛知縣……………一七五

第十五節 靜岡縣……………一八一

第十六節 山梨縣……………一八三

第十七節 滋賀縣……………一八五

第十八節 岐阜縣……………一八六

第十九節 長野縣……………一八七

第二十節 宮城縣……………一八八

第二十一節 山形縣……………一八九

第二十二節 秋田縣……………一九一

第二十三節 福井縣……………一九二

第二十四節 富山縣……………一九五

第二十五節 岡山縣……………一九六

第二十六節 山口縣……………一九九

第二十七節 和歌山縣……………100

第二十八節 德島縣……………101

第二十九節 福岡縣……………101

第三十節 佐賀縣……………107

第三十一節 宮崎縣……………107

第三十二節 鹿兒島縣……………108

第三十三節 北海道廳……………110

第三十四節 臺灣……………114

第四章 洪水防禦……………115

第一節 總說……………115

第二節 東京府……………117

第三節 京都府……………118

第四節 大阪府……………121

第五節 神奈川縣……………124

第六節 兵庫縣……………125

第七節 長崎縣……………126

第八節 新潟縣……………127

第九節 埼玉縣……………128

第十節 群馬縣……………129

第十一節 千葉縣……………130

第十二節 茨城縣……………131

第十三節 栃木縣……………132

第十四節 奈良縣……………133

第十五節 三重縣……………134

第十六節 愛知縣……………135

第十七節 靜岡縣……………136

第十八節 山梨縣……………137

第十九節 滋賀縣……………138

第二十節 岐阜縣……………139

第二十一節 長野縣……………140

第二十二節 宮城縣……………141

第二十三節 福島縣……………142

第二十四節 岩手縣……………143

第二十五節	青森縣	二七二
第二十六節	山形縣	二七二
第二十七節	秋田縣	二七四
第二十八節	福井縣	二七四
第二十九節	石川縣	二七七
第三十節	富山縣	二八〇
第三十一節	鳥取縣	二八三
第三十二節	島根縣	二八六
第三十三節	岡山縣	二八六
第三十四節	廣島縣	二九〇
第三十五節	山口縣	二九二
第三十六節	和歌山縣	二九三
第三十七節	徳島縣	二九四
第三十八節	香川縣	二九六
第三十九節	愛媛縣	二九六
第四十節	高知縣	三〇〇
第四十一節	福岡縣	三〇四

第四十二節	大分縣	三〇五
第四十三節	佐賀縣	三〇六
第四十四節	熊本縣	三〇六
第四十五節	宮崎縣	三〇三
第四十六節	鹿児島縣	三〇五

第五章 砂防工事の由來……………三七

第一節	總 說	三七
第二節	維新前に於ける砂防工事の施設	三八

第六章 明治年間に於ける砂防工事の施設……………三五

第一節	砂防法發布以前に於ける施設及び取締	三五
第二節	砂防法の發布及び工事計畫	三八
第三節	内務省直轄工事	三三
第四節	府縣工事	三四

第三編 築 港

第一章 緒言

三七

第二章 築港事業

三八〇

第一節 野蒜港	三八〇
第二節 坂井港	三八五
第三節 長崎港	三九〇
第四節 橫濱港	三九一
第五節 若松港	三九七
第六節 函館港	四〇一
第七節 新潟港	四〇三
第八節 名古屋港	四〇七
第九節 小樽港	四〇九
第十節 高松港	四二二
第十一節 大阪港	四二四
第十二節 基隆港	四二七
第十三節 伏木港	四二九
第十四節 鹿兒島港	四三三

第十五節 三池港	四三四
第十六節 神戶港	四三五
第十七節 釜山港	四三六
第十八節 那霸港	四三一
第十九節 岩內港	四三三
第二十節 大連港	四三五
第二十一節 高雄港	四三六
第二十二節 釧路港	四四〇
第二十三節 清水港	四四二
第二十四節 敦賀港	四四三
第二十五節 大分港	四四六
第二十六節 留萌港	四四七
第二十七節 四日市港	四四八
第二十八節 關門海峽	四五〇
第二十九節 船川港	四五二
第三十節 仁川港	四五二
第三十一節 鎮南浦	四五四

第四編 上下水道

第一章 上水道總説……………四九九

- 第一節 起原及び發達……………四九九
- 第二節 普及並に効果……………四九九
- 第三節 施設の大要……………四七一

第二章 下水道總説……………四八五

- 第一節 起原及び發達……………四八五
- 第二節 施設の大要……………四八七

第三章 關東地方上水道の施設……………五〇一

- 第一節 東京市上水道……………五〇一
- 第二節 宮城水道……………五〇五
- 第三節 横濱市上水道……………五〇六
- 第四節 横須賀軍用水道……………五〇九
- 第五節 横須賀市上水道……………五〇九

第四章 東北・北陸・東山及び東海地方上水道の施設……………五二三

- 第六節 秦野町水道……………五二〇
- 第七節 高崎市上水道……………五二〇
- 第八節 水戸市上水道……………五二一
- 第九節 泉津村外四箇所上水道……………五二二

- 第一節 鹽釜町上水道……………五二三
- 第二節 郡山市上水道……………五二三
- 第三節 秋田市上水道……………五二四
- 第四節 青森市上水道……………五二五
- 第五節 新潟市上水道……………五二五
- 第六節 甲府市上水道……………五二六
- 第七節 名古屋市上水道……………五二七
- 第八節 諸戸(桑名町)上水道……………五二九
- 第九節 古川町外十二箇所上水道……………五二九

第五章 北海道地方上水道の施設……………五三二

- 第一節 函館市上水道……………五三二

第二章 小樽市上水道……………五三
 第三章 岩見澤町上水道……………五四
 第四章 旭川軍用水道……………五四
 第五章 根室上水道……………五五

第六章 近畿地方……………

第一節 京都市上水道……………五六
 第二節 京都御所水道……………五六
 第三節 京都軍用水道……………五九
 第四節 大阪市上水道……………五〇
 第五節 堺市上水道……………五〇
 第六節 神戸市上水道……………五〇
 第七節 舞鶴要港水道……………五九
 第八節 宮津町及び城崎町上水道……………五九

第七章 中國及び四國地方……………

第一節 廣島市上水道附廣島軍用水道……………五〇
 第二節 吳軍港上水道……………五〇

第八章 九州地方上水道の施設……………

第一節 長崎市上水道……………五四七
 第二節 佐世保軍用水道……………五四九
 第三節 佐世保市上水道……………五五〇
 第四節 門司市上水道……………五五〇
 第五節 小倉市上水道……………五五二
 第六節 若松市上水道……………五五三
 第七節 小濱町外四箇所上水道……………五五四

第九章 臺灣上水道……………

第一節 淡水上水道……………五五五
 第二節 基隆上水道……………五五六
 第三節 彰化上水道……………五五六

第四節 臺北上水道……………五五七

第五節 高雄上水道……………五五七

第六節 嘉義上水道……………五五八

第七節 臺南上水道……………五五九

第八節 金山外六箇所上水道……………五五九

第十章 朝鮮上水道……………五六一

第一節 釜山上水道……………五六一

第二節 京城水道……………五六二

第三節 仁川上水道……………五六三

第四節 平壤上水道……………五六四

第五節 龍山水道……………五六四

第六節 木浦上水道……………五六五

第七節 鎮南浦上水道……………五六五

第八節 晋州及び草梁上水道……………五六六

第十一章 下水道の施設……………五六七

第一節 東京市下水道……………五六七

第二節 大阪市下水道……………五七四

第三節 廣島市下水道……………五七九

第四節 仙臺市下水道……………五八二

第五節 名古屋市下水道……………五八五

第六節 明石市下水道……………五八八

第七節 函館市下水道……………五八九

第八節 神戸市下水道……………五九〇

第九節 岡山市下水道……………五九一

第十節 下關市下水道……………五九一

第十一節 長崎市下水道……………五九二

第十二節 臺北市下水道……………五九二

第五編 軌道

第一章 總說……………五九七

第二章 軌道の沿革……………六〇一

第一節 馬車軌道……………六〇一

第二節 汽車軌道……………六〇五

第三節 石油發動車軌道……………六〇六

第四節 自動車軌道……………六〇七

第五節 人車軌道……………六〇七

第六節 電氣軌道……………六〇九

第三章 法規及び監督……………六二五

第一節 軌道條例及び軌道條例取扱方心得……………六二五

第二節 軌道の主管……………六二九

第三節 聯結車輛の延長……………六三二

第四節 軌道の行進速力……………六三三

第四章 主要軌道……………六三三

第一節 東京市營軌道……………六三三

第二節 小田原電氣鐵道……………六三〇

第三節 大日本軌道……………六三三

第四節 高崎水力電氣株式會社の軌道……………六三七

第五節 京都電氣鐵道……………六三八

第六節 山梨輕便鐵道……………六四〇

第七節 宇都宮石材軌道……………六四一

第八節 名古屋電氣鐵道……………六四二

第九節 阪神電氣鐵道……………六四三

第十節 京濱電氣鐵道……………六四四

第十一節 土佐電氣鐵道……………六四六

第十二節 筑後軌道……………六四七

第十三節 大阪市營電氣鐵道……………六四八

第十四節 祐徳軌道……………六五〇

第十五節 京阪電氣鐵道……………六五一

第十六節 箕面有馬電氣軌道……………六五二

第十七節 南海鐵道株式會社の軌道……………六五三

第十八節 朝倉軌道……………六五三

第十九節 九州電氣軌道……………六五四

第二十節 大阪電氣軌道……………六五五

第二十一節 美濃電氣軌道……………六五六

第二十二節 京都市營電氣軌道……………六五七

第二十三節 九州水力電氣株式會社の軌道……………六九
 第二十四節 菊池軌道……………六〇

第五章 本土以外の軌道……………六一

第一節 朝鮮に於ける軌道……………六一
 第二節 臺灣に於ける軌道……………六三

第六編 運河

第一章 緒言……………六七

第二章 北上・阿武隈兩川間の運河……………七〇

第一節 貞山運河……………七〇
 第二節 北上・東名兩運河……………七三

第三章 琵琶湖疏水工事……………七六

第一節 緒言……………七六
 第二節 工事經過……………七九
 第三節 各工事の説明……………八二

第四節 工事費……………八六

第五節 琵琶湖勢田川及び其の水理……………八九

第六節 鴨川運河……………九一

第七節 水利事業……………九三

第八節 第二琵琶湖疏水工事大要……………九八

第四章 利根運河……………七三

第一節 利根運河の必要と其の沿革……………七三

第二節 工事設計及び施工……………七三

第三節 營業……………七三

第五章 市内の運河及び其の他の運河……………七六

第一節 東京市内の運河……………七六

第二節 大阪市内の運河……………七六

第三節 名古屋市内の運河……………七六

第四節 神戸市内の運河……………七六

第五節 蒲原其の他の運河……………七六

第七編 發電水力

第一章 發電水力の發達の概況	七七
第二章 水力工事改進の摘要	七九
第一節 分水堰堤及び取入口	七九
第二節 水路	七九
第三節 特種工事	七九
第三章 發電水力調査	七四
第一節 調査機關	七五
第二節 調査の程度	七六
第三節 調査の方法	七七
第四節 調査に關する用語及び標準	七八
第五節 地點數及び馬力數	七九
第六節 流量調査	七九

第八編 農業土木

第一章 緒言	七九七
第二章 開墾及び疏水事業	八〇〇
第一節 安積郡大槻原開墾(一名開成山開拓)	八〇〇
第二節 猪苗代湖疏水工事	八〇七
第三節 那須疏水普通水利組合事業	八〇八
第四節 其他の開墾事業表	八一
第三章 灌溉事業及び溜池工事	八二三
第一節 灌溉事業	八二三
第二節 溜池工事	八二〇
第四章 排水事業	八二五
第五章 干拓事業	八三〇
第六章 耕地整理事業	八三六

第九編 軍事土木

第一章 陸軍の部……………八四四

- 第一節 軍事土木の沿革……………八四四
- 第二節 海岸防備事業の進展……………八四七
- 第三節 軍用鐵道の一般……………八四八
- 第四節 海堡工事の一般……………八五五

第二章 海軍の部……………八六八

- 第一節 横須賀軍港軍事土木の一般……………八七〇
- 第二節 吳軍港軍事土木の一般……………八七七
- 第三節 佐世保軍港軍事土木の一般……………八八〇
- 第四節 舞鶴軍港軍事土木の一般……………八八三

第十編 航路標識

第一章 總 說……………八八七

第二章 古今沿革……………八九一

第三章 本邦の航路標識……………八九五

第一節 古代の標識……………八九五

第二節 徳川時代の標識……………八九九

第三節 開港以後及び明治年間の標識……………九〇九

第四節 臺灣標識……………九一二

第五節 樺太標識……………九一六

第六節 朝鮮標識……………九一七

第七節 滿洲標識……………九三五

第八節 青島標識……………九三七

第四章 本邦燈臺に關する諸表……………九四一

第十一編 都市事業

第一章 總 說……………九六一

第二章 東京市に於ける市區改正……………九六三

第三章 東京市區改正機關……………九六五

第一節 東京市區改正委員會組織……………九六五

第二節 市區改正事務執行機關……………九六五
 第三節 市區改正事業費の負擔及び其の議決機關……………九六六

第四章 東京市區改正事業……………九六七

第一節 設計の決定……………九六七
 第二節 事業の實況……………九六八
 第三節 東京市區改正新舊設計對照……………九九五

第五章 東京市區改正事業の實蹟……………九六九

第一節 道路の部……………九六九
 第二節 河川の部……………一〇〇一
 第三節 橋梁の部……………一〇〇一
 第四節 公園の部……………一〇〇四
 第五節 鐵道の部……………一〇〇四
 第六節 市場の部……………一〇〇五
 第七節 火葬場及び共葬墓地の部……………一〇〇五
 第八節 上下水道及び築港の部……………一〇〇六
 第九節 東京市區改正事業費支出額……………一〇〇六

第六章 結 論……………一〇〇八

第十二編 測 量

第一章 總 說……………一〇一三

第一節 明治以前の測量……………一〇一三
 第二節 明治時代の測量……………一〇一六

第二章 地形測量、陸地測量部……………一〇一八

第一節 總 論……………一〇一八
 第二節 三角測量……………一〇一九
 第三節 水準測量……………一〇二四
 第四節 地形測量……………一〇二七
 第五節 結 論……………一〇二八

第三章 地形測量、地質調査部……………一〇三〇

第四章 海洋測量……………一〇三四

第一節 總論.....1034

第二節 沿海測量.....1034

第三節 經緯度測定.....1036

第四節 地磁氣測量.....1040

第五節 潮汐觀測.....1041

第六節 海圖.....1041

第七節 結論.....1042

第五章 邊地測量.....1044

第一節 北海道.....1044

第二節 樺太.....1046

第三節 臺灣.....1048

第四節 朝鮮.....1049

第六章 基本觀測.....1051

第一節 測地學上の觀測.....1051

第二節 磁力觀測.....1053

第十三編 土木行政

第一章 總說.....1055

第一節 土木司管廳の變遷.....1055

第二節 土木行政の概要.....1056

第二章 道路行政.....1057

第一節 道路.....1057

第二節 軌道.....1057

第三章 河川・砂防・運河及び公有水面.....1058

第一節 河川.....1058

第二節 砂防.....1058

第三節 運河.....1058

第四節 海湖沼池用惡水路.....1058

第四章 港灣.....1058

第五章 都市土木.....1058

第一節 市區改正……………1021

第二節 水道……………1025

第三節 下水道……………1029

第十四編 土木教育

第一章 緒言……………1101

第二章 高等教育……………1101

第一節 東京大學……………1101

第二節 工部大學……………1104

第三節 東京帝國大學工科大学……………1105

第四節 京都帝國大學理工科大学……………1106

第五節 九州帝國大學工科大学……………1107

第六節 鐵道建設及び燈臺に關する技術者の養成……………1107

第七節 札幌農學校……………1108

第八節 第三高等學校工學部……………1109

第九節 第五高等學校工學部並に熊本高等工業學校……………1110

第十節 名古屋高等工業學校……………1110

第十一節 仙臺高等工業學校……………1111

第三章 普通教育……………1111

第一節 岡山工業學校……………1113

第二節 攻玉社工學校……………1113

第三節 工手學校……………1115

第四節 岩倉鐵道學校……………1117

第五節 關西商工學校……………1118

第六節 商工學校……………1119

第七節 東亞鐵道學校……………1119

第八節 中央工學校……………1120

挿圖目錄

第一圖	愛本橋、錦帶橋、猿橋……………	一〇—二
第二圖	宮城内山里の吊橋……………	四〇
第三圖	彈正橋……………	四三
第四圖	クロガネ橋……………	四四
第五圖	琵琶湖疏水運河橋……………	四四
第六圖	淀川改修平面圖……………	(卷末)
第七圖	利根川第一期改修平面圖……………	(同)
第八圖	利根川第二期改修平面圖……………	(同)
第九圖	利根川第三期改修平面圖(其一)……………	(同)
第十圖	利根川第三期改修平面圖(其二)……………	(同)
第十一圖	利根川第三期改修平面圖(其三)……………	(同)
第十二圖	江戸川改修平面圖……………	(同)
第十三圖	渡良瀬川改修平面圖……………	(同)
第十四圖	信濃川改修大河津開鑿工事附近一覽圖……………	(同)
第十五圖	木曾川下流改修工事平面圖……………	(同)

第十六圖	北上川改修平面圖……………	(卷末)
第十七圖	庄川改良工事平面圖……………	(同)
第十八圖	吉野川改修平面圖……………	(同)
第十九圖	九頭龍川第一期改修工事平面圖……………	(同)
第二十圖	九頭龍川第二期改修工事平面圖……………	三三—三三
第二十一圖	遠賀川改修工事竣功平面圖……………	(卷末)
第二十二圖	高梁川改修平面圖……………	三六—三七
第二十三圖	荒川下流改修平面圖……………	(卷末)
第二十四圖	加治川改修工事計畫圖……………	(同)
第二十五圖	西川改修工事計畫平面圖……………	一六〇—一六一
第二十六圖	野蒜築港圖……………	(卷末)
第二十七圖	坂井築港圖……………	(同)
第二十八圖	長崎築港圖……………	(同)
第二十九圖	横濱築港圖……………	三九—三七
第三十圖	若松築港圖……………	(卷末)
第三十一圖	函館築港圖……………	(同)
第三十二圖	新潟築港圖……………	(同)

第三十三圖	名古屋築港圖	(卷末)
第三十四圖	小樽築港圖	(同)
第三十五圖	高松築港圖	(同)
第三十六圖	大阪築港圖	(同)
第三十七圖	基隆築港圖	(同)
第三十八圖	伏木築港圖	(同)
第三十九圖	鹿兒島築港圖	(同)
第四十圖	三池築港圖	(同)
第四十一圖	神戸築港圖	(同)
第四十二圖	釜山築港圖	(同)
第四十三圖	那霸築港圖	(同)
第四十四圖	岩内築港圖	(同)
第四十五圖	大連築港圖	(同)
第四十六圖	高雄築港圖	(同)
第四十七圖	釧路築港圖	(同)
第四十八圖	清水築港圖	(同)
第四十九圖	敦賀築港圖	(同)

第五十圖	大分築港圖	(卷末)
第五十一圖	留萌築港圖	(同)
第五十二圖	四日市築港圖	(同)
第五十三圖	關門海峽圖	(同)
第五十四圖	船川築港圖	(同)
第五十五圖	仁川築港圖	四五四—四五五
第五十六圖	鎮南浦築港圖	四五四—四五五
第五十七圖	琵琶湖疏水線路圖	(卷末)
第五十八圖	琵琶湖疏水工事長等山隧道進行圖	(同)
第五十九圖	インクライン舟柁圖	六九二—六九三
第六十圖	京都第二疏水發電所及鐵管出入口之圖	(卷末)
第六十一圖	砂地抗力試驗成績圖	(同)
第六十二圖	海堡工事圖(明治三十九年實測)	(同)
第六十三圖	海堡工事頭部防浪堤圖	(同)
第六十四圖	海堡工事震災後頭部平面圖	(同)
第六十五圖	橫須賀造船所創業土木工事計畫圖	八七〇—八七一
第六十六圖	橫須賀港修船臺圖(明治元年)	八七一—八七三

第六十七圖	橫須賀港第一船渠築造中圖(明治三年).....	八七二—八七三
第六十八圖	住吉高燈籠圖.....	八九七
第六十九圖	浦賀港舊燈明臺圖.....	九〇一
第七十圖	大阪川口及び浦賀港濤標圖.....	九〇七
第七十一圖	光濟丸.....	九三一—九三三